



メインアプローチからの風景。とおり縁から繋がるスロープは主玄関へと市民を導く。まわり縁から建物内部への敷居を下げるために、床を内部空間と同じ色モルタル仕上げとした。



北東上空から見る。屋上は避難広場となり市民の安全を守る。太陽光発電設備、自家発電機、キュービクル等設備機能は全て屋上に集約。



北東地上から見る。建物の内部まで段差を設けず、シームレスなアプローチを可能にする。

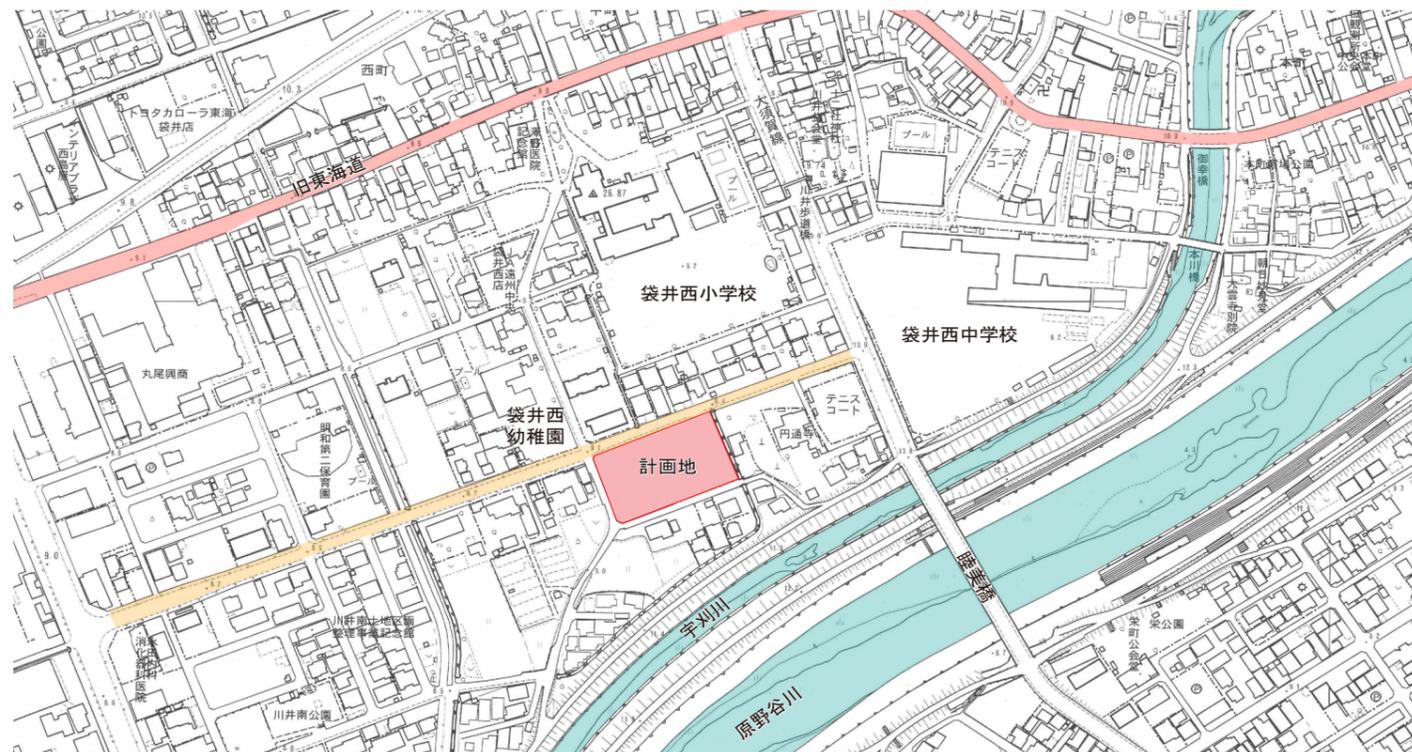
袋井西コミュニティセンター 彩雲館

ふらっと・ふれあい・交流センター

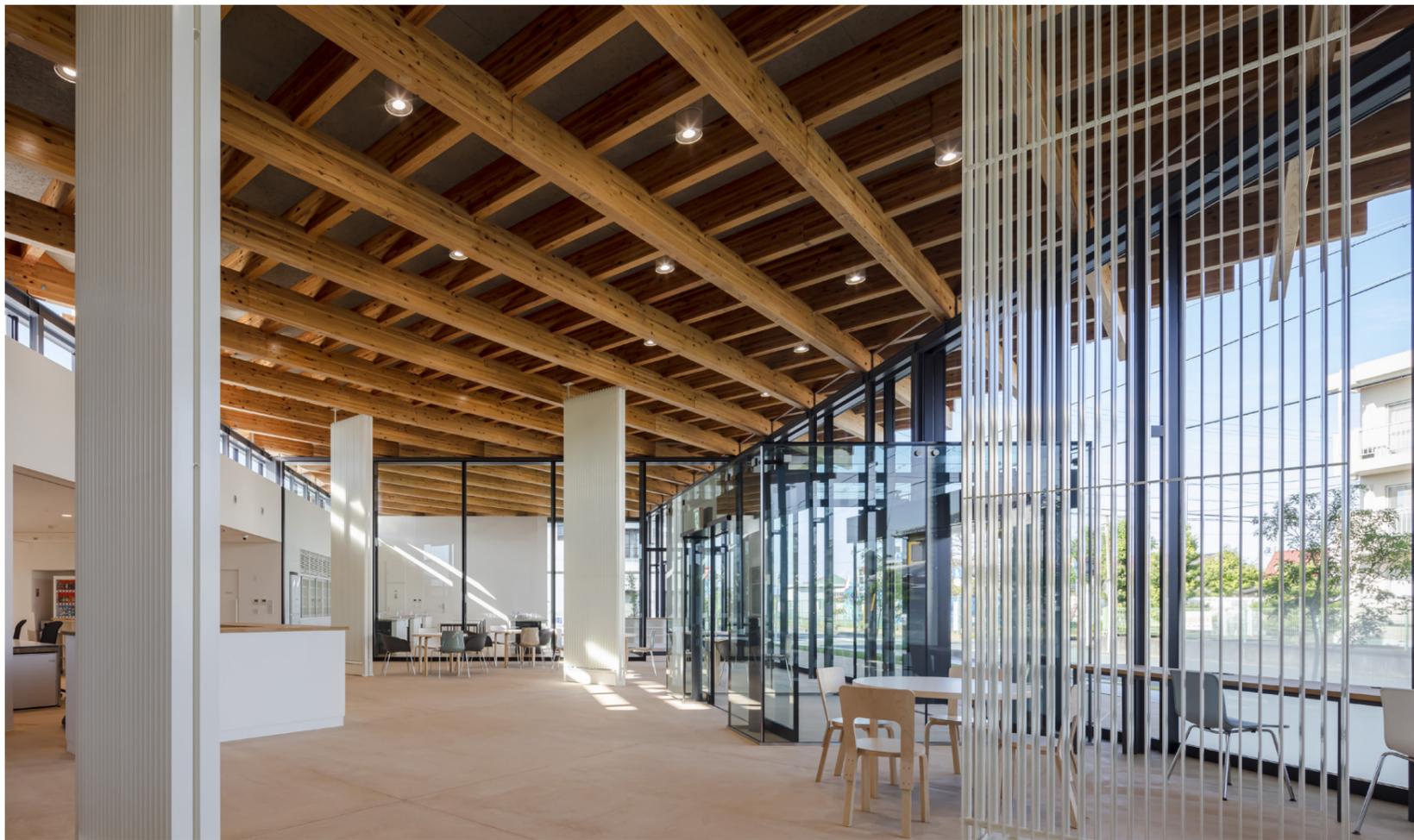
敷地の袋井西地区は古くは旧東海道が通り、東西の交流に深く関わってきた賑わいの街。本プロジェクトはかつての旧東海道のように、人々が集い賑わい溢れる開かれた公共施設を目指した。

施設用途は、公民館からコミュニティセンターにコンバージョンすることで従来の閉鎖的な活動の場から、誰もが利用しやすい開かれた活動の場へと展開していく。建物は平屋建てとし、床の土間仕上げや屋根の木梁を内外連続させることで街から建物までフラットかつシームレスなアプローチを可能にする。建物全周には軒を回し、内部の賑わいを外部にまで創出していく。

都市から建築、市民の活動が連続的に繋がることで、賑わいの輪は敷地を超えて街へと広がっていくことを期待している。



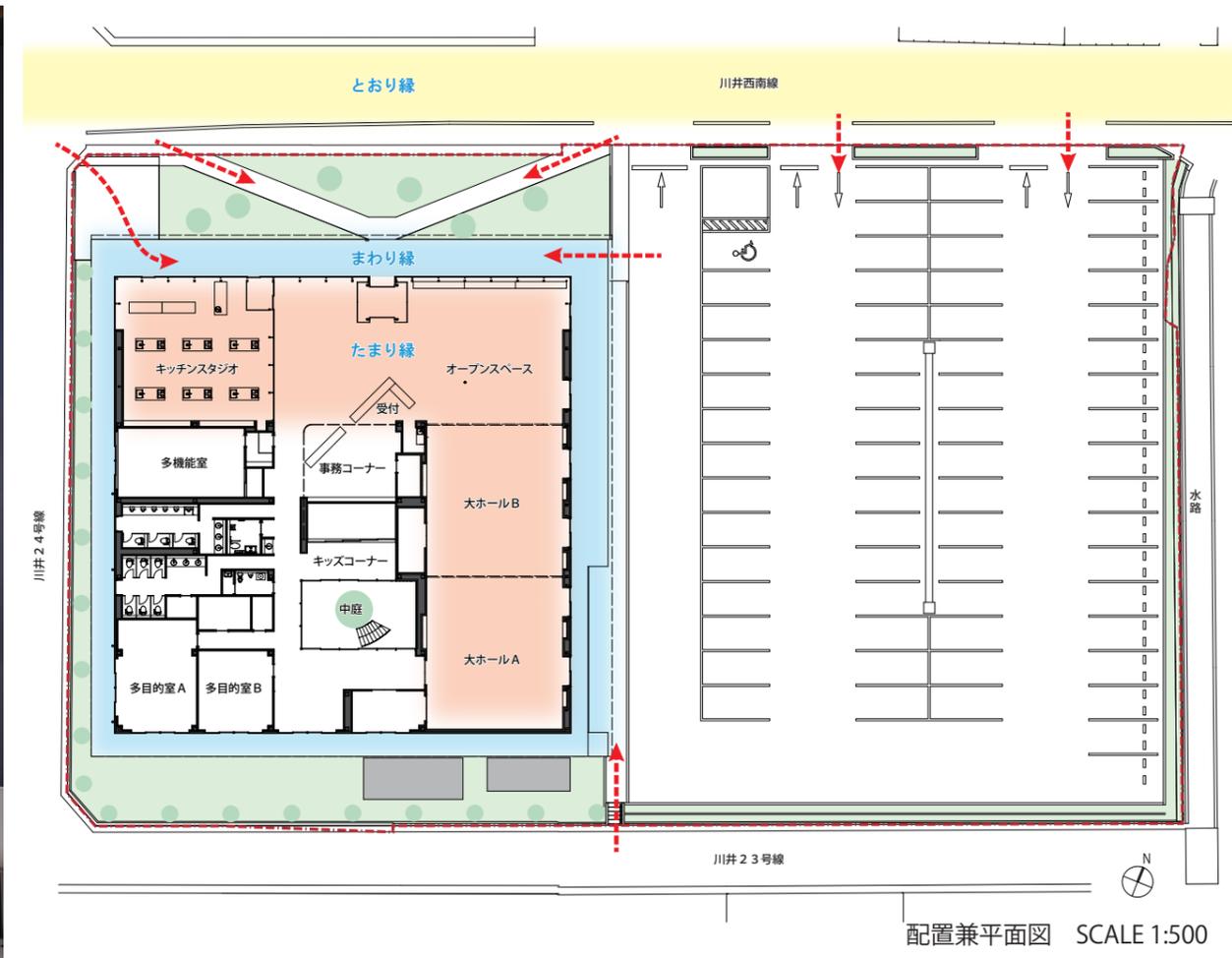
北西側鳥瞰。周辺の建物に対して高さを抑え、圧迫感を軽減。建物全方位に軒を設け市民を大らかに迎え入れる。



オープンスペースからキッチンスタジオ（たまり縁）を望む。床は色モルタル仕上げとし、市民が気軽に立ち寄りやすい空間を目指した。格子梁に合わせて輻射パネルを配置し、機能と空間の間仕切りを兼ね備えたデザイン。右手前は北側学習コーナー。輻射パネルが緩やかに領域を作る。



キッチンスタジオからオープンスペース（たまり縁）を望む。オープンスペースと連続的な空間構成とすることで双方の活動が感じられる。



配置兼平面図 SCALE 1:500

まちに開く3つの縁

縁側や縁結びのように、『縁（えん）』という言葉には、2つ以上のものが寄りついて関わりを持つ作用を表すとされている。私たち都市と建築、建築と人、人と人がそれぞれ関わり合う様を『縁』という言葉を用いながら提案することで、コミュニティセンターをまちに開かれていくことを目指した。

とおり縁＝都市×建築

平屋建ての建築とし都市から建物までシームレスなランドデザインとすることで境界の無いフラットな関係性をつくる。敷地境界のフェンスや門扉をすべて取り払い、都市に対して開かれた大らかな建方となる。

まわり縁＝建築×人

建物全周に軒を回し、半屋外スペースを設けることでどこからでも建物へアプローチすることが可能。木の格子梁はかつての旧東海道の軒を連ね様に重ね合わせ、市民を大らかに迎え入れる。

たまり縁＝人×人

施設メインの用途となる、オープンスペース、キッチンスタジオ、ホールを集約配置することで市民のたまり場をつくり、賑わいを外部に対して発信していく。

施設のコンセプトは「ふらっと・ふれあい・交流センター」。市民の誰もが気軽に立ち寄り、利用でき、集い合うことで新たな交流が生まれるようにと願いが込められている。



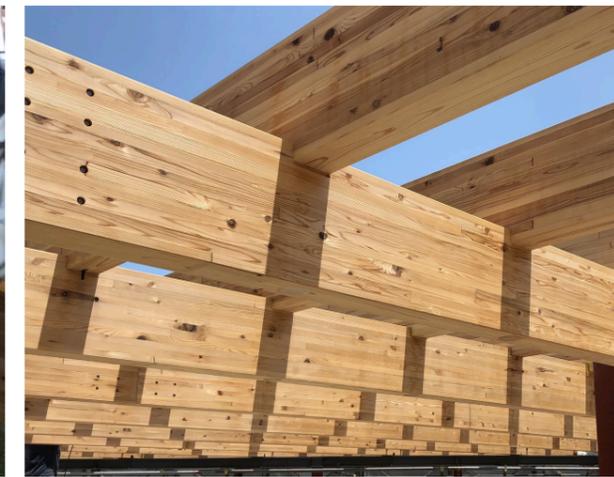
オープンスペース、大ホール（たまり縁）全体を望む。大ホールの可動間仕切壁を開放することで、市民の賑わい空間となる。



格子梁の上弦材は野地板木毛セメント板 3 × 6 板の施工性を考慮して @910mm に設定。下弦材は構造計画の合理性と軒先のリズムが生まれるように上弦材の 1.5 倍の @1,365mm に設定。



工場加工の風景。木材は静岡県産材のスギ集成材 120×360 を使用。



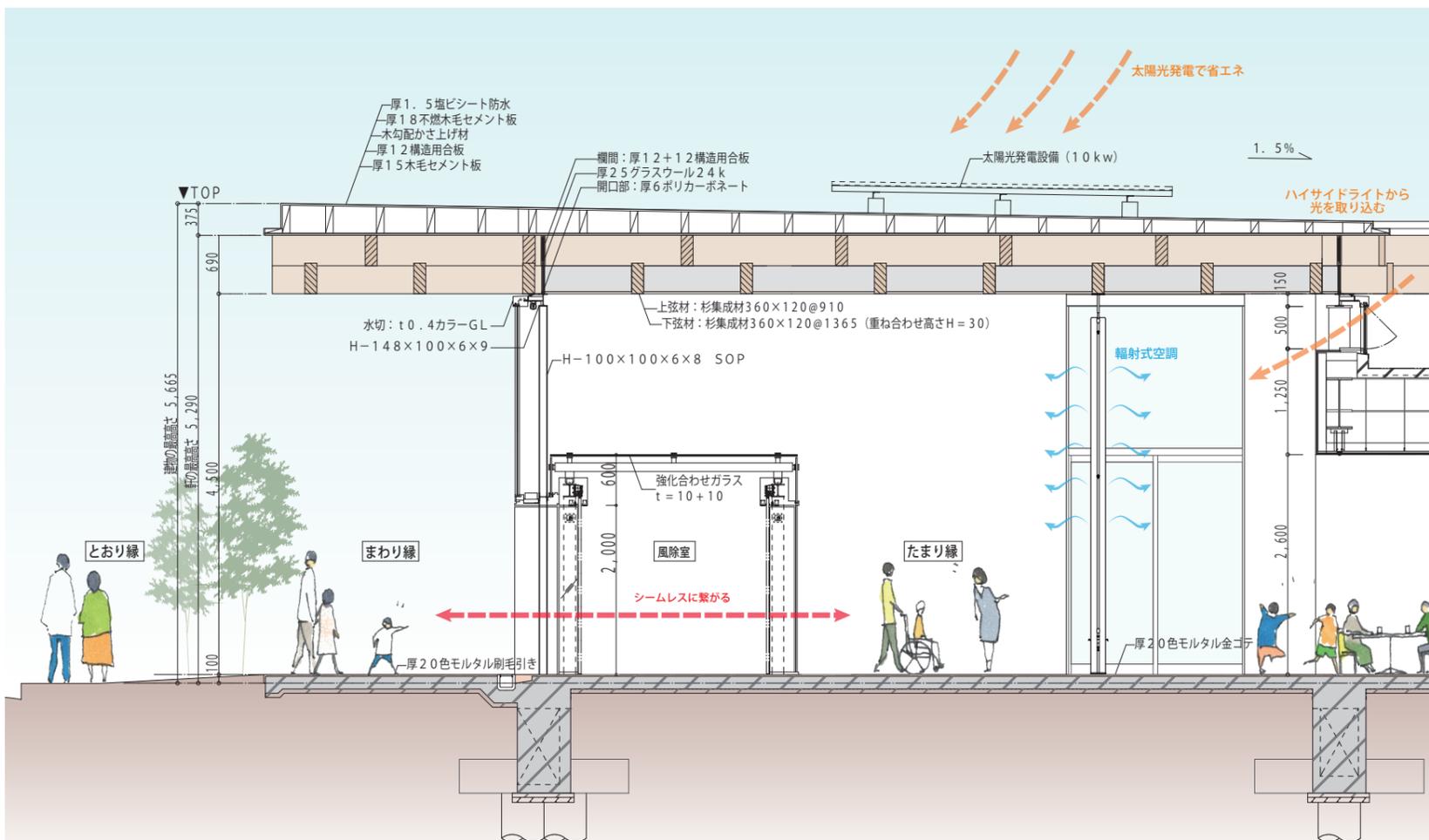
格子梁の組上げ施工風景。接合はスチールプレートにドリフトピンにて固定。



エントランスからフロントサッシを見る。



サッシと間柱位置を揃えファサードの透明性を高める。



断面図 SCALE 1:80

3つの縁を紡ぐディテール

まちに開く3つの縁を紡ぐために、オープンで開放的な構造計画を提案した。

とおり縁: 北側道路に対して内部空間の賑わいが外部にまで表れるように、間柱のメンバーを H-148 × 100 × 6 × 9 とし透明性を高めたファサードとした。

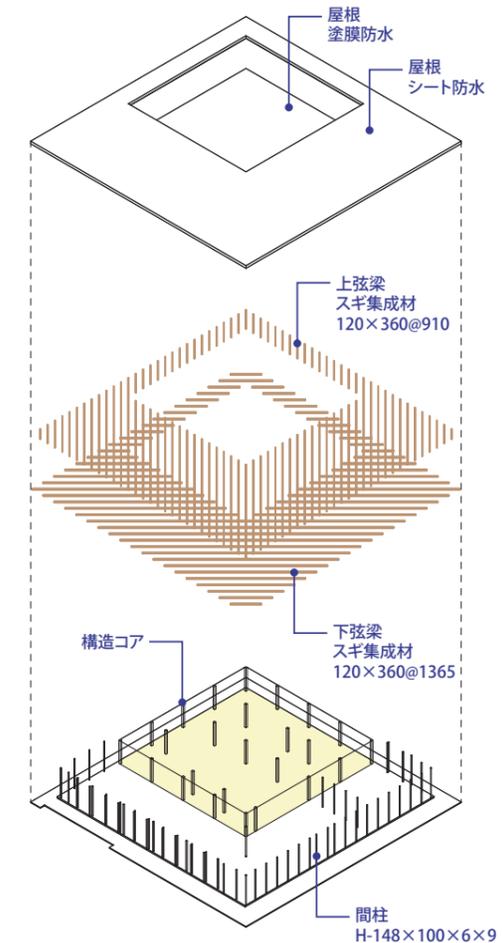
まわり縁: 市民を包み込む大きな軒は、静岡県産材のスギ集成材 120 × 360 で構築した。木梁の角度を 45 度振り、構造的に最も負担が掛かる出隅に梁を通すことで柱の無い開放的な屋根構造を可能とした。

たまり縁: オープンスペース、大ホール、キッチンスタジオは、建物外周部の間柱からコア部にかけて梁を掛け渡すことで気積の大きい無柱空間を実現した。

鉄骨造と木造の特性を活かしたハイブリッド構造

木質化を目指した純木造とする場合、建物全体に耐震要素をバランスよく配置する必要がある。天井高さが高くなると柱断面も大きくなるのが課題である。今回は屋根の木造化を実現するために、コア部分を鉄骨造で計画した。木屋根の水平力をコア部分で負担することによって、ファサードの耐震要素を無くすことを可能とした。

木屋根は集成材を用いた格子梁構造とし、格子の主軸を 45 度傾けることで、水平ブレースを用いずに水平力をコア部まで伝達させることで、意匠性の高い構造フレームを実現した。



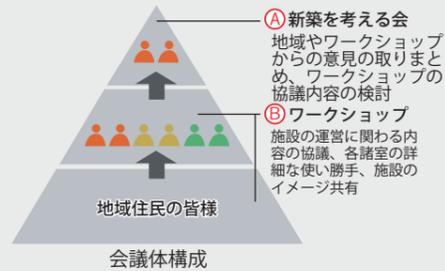
構造アクソメ

三位一体で地域をつくる

本プロジェクトは、設計から完成に至るまで多くの地域関係者が関わり合い、【建築をつくる】ことを地域住民、地元学生、地元企業と共有することで、新たな地域コミュニティを形成することを目的とした。

地域住民とつくる

- ・住民参加型の設計プロセスを採用し、五自治会から選抜された市民代表者から意見を聞き、地域コミュニティについて語り合う。
- ・ワークショップで語られた意見を「新築を考える会」に意見を集約し、ワークショップの協議内容を検討し合う。
- ・設計から工事期間にかけて、かわら版を全9回発行し市民に対して施設の進捗状況を常に共有し周知を図る。



ワークショップで地域住民と対話

地元の大学とつくる

- ・地元大学の静岡理科大学もプロジェクトに参加し公共施設を地域の手によってつくる大切さを共有する。
- ・大学教授にはファシリテーターの役割として参加、学生にはワークショップに参加してもらい、地域住民と交流を図りながら、地域の建築の在り方について考える。
- ・今後の地域活動においても大学と連携し、より良い街づくりを共に構築していける関係を築いていく。



ファシリテーターが地域コミュニティの大切さを語る

地元の企業とつくる

- ・入札は地元建設会社に限定した発注条件とした。地域を良く知る地元施工会社が参加することで、地域の建築を地域の手でつくり上げることを目指した。
- ・長寿命化を目指す公共施設を実現していくために地元企業が施工に携わることで、竣工後の施設の不具合や修繕工事に迅速に対応しやすい。
- ・地域の施設を地域の手でつくることによって、企業の成長にも繋がり、地域の活性化に寄与する。



施工中の工事現場に市民を案内



大ホール：まちづくり講演会の活動風景



キッチンスタジオ：料理イベントの風景



まわり縁：軒下に移動販売車を停め市民が買物。



まわり縁：半屋外で焼き芋を来館者に振舞う風景。

所在地：静岡県袋井市川井
 構造：鉄骨造一部木造
 階数：平屋建
 敷地面積：3,913.79㎡
 建築面積：1,263.82㎡
 延床面積：1,163.21㎡

竣工年月：令和3年3月
 設計期間：2018年7月～2019年7月
 施工期間：2019年11月～2021年3月
 事業主：袋井市
 施工会社：株式会社永井組
 撮影：高橋菜生



北側の外観を望む。敷地境界にフェンスを設けないことで地域に開けた施設の在り方を表現した。